

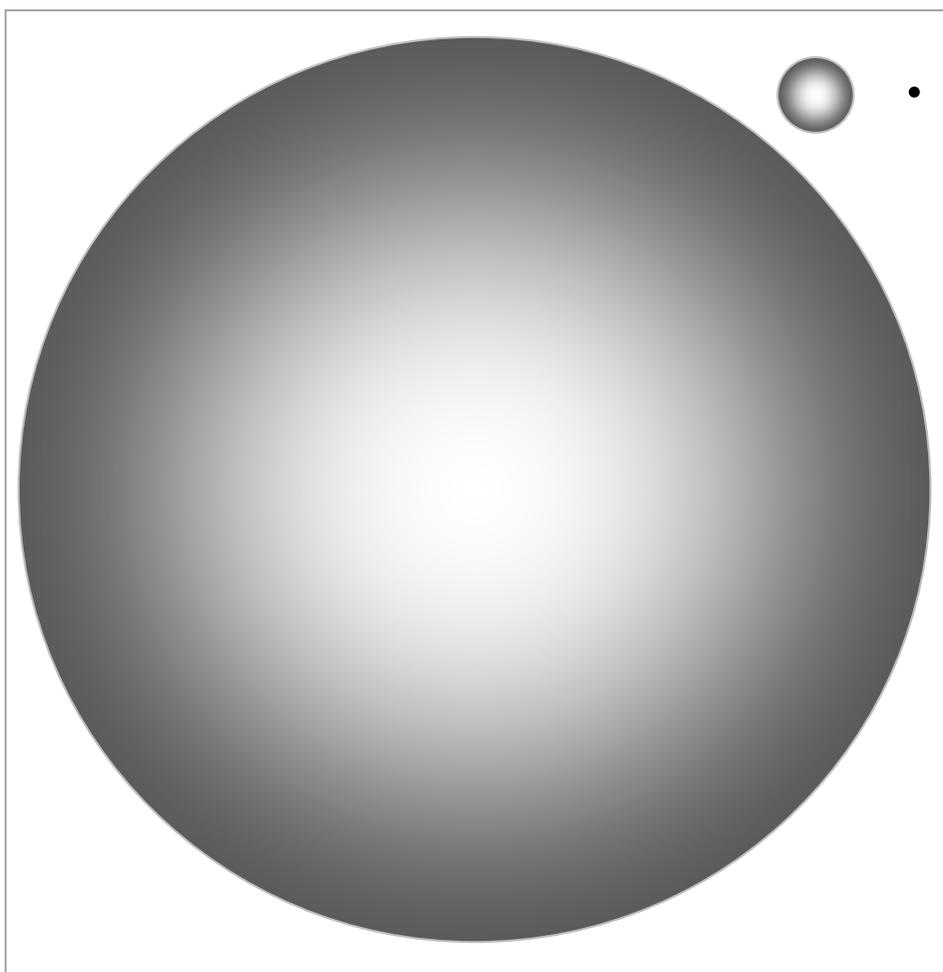
第7話

週刊

タバコの正体

前回、タバコの煙は空気の流れとともに、あたり一面に漂う事を紹介しました。白い煙はどこにも見えないのに、ニオイはかなり遠くまで感じるすることができます。煙たなくてもニオイだけで、イヤな気分になる事も多いですね。

ちなみに、よく考えると目に見えるニオイなんてありません。ニオイの粒子は小さくて目に見えないのが普通です。では、タバコの煙の粒子はどのくらいの大きさでしょうか？



タバコの粒子の直径は、0.01~0.001 μm だそうです。と言われても実感がわかないでしょうね。そこで、ちょっと次の光景を思い起こしてください。

例えば、降っているのがわからないくらい細かい雨(霧雨)の粒子は100~50 μm 。遠くの景色がかすむような霧の粒子は1.0~0.01 μm だそうです。

それらの大小関係は、イメージ図のように大きい順に、霧雨の粒子、霧の粒子、そしてタバコの粒子ということになります。タバコの煙は、とんでもなく小さいことが分かります。

こんな小さい粒子だと、衣服や部屋中の物の奥深くまで行

き渡ってしまい、そのニオイを除去するのは困難です。だから、喫煙が日常的に行われている部屋はいつも臭います。そんな部屋に入るとタバコのニオイを強制的に嗅がされることになってしまいます。煙がないので“受動喫煙”とは言いにくいこの状況は“残留受動喫煙”または Third Hand Smoke (サードハンドスモーク)と呼ばれています。部屋だけではなく、喫煙者とすれ違っただけで臭う場合も、サードハンドスモークに近いと言えるでしょう。

さて、“臭う”ということは、この粒子が鼻まで届いている証拠です。こんな小さな粒子が身体の中に入ったら、隅々にまで入り込んでしまうように感じませんか。しかも、とても有害な毒が入っている粒子なのです。……ゾッとしますよね。

産業デザイン科 奥田 恭久